「悪霊物語」自作解説

江戸川乱歩

青空文庫

私のつけ句

連作とは連歌俳諧の如きものであろう。第一の発句は余り限定的でない方がよろしい。脇はこれをいかようにも受けとるであろう。第三はまたそれを別の方向に転化するであろう。そして、最後の揚句と最初の発句とは似もつかぬ姿となることもあり得る。

私はこの連作の第一回を、ホフマンの「砂男」や、ワイルドの「ドリアン・グレイ」を連想しながら書いた。これをすなおに引きのばせば、幻想怪奇の物語となる。老人形師は人形に生命を吹きこむ錬金術師であろう。また、モデル女を誘拐し、監禁する色魔であろう。小説家はこの老魔術師の心を知る人である。知りながら、その妖術のとりことなるのである。

彼はその女の、人間とも人形ともつかぬ妖美にうたれ、これを恋するであろう。この女は人間か、それとも老魔術師が造り出した人形か、この疑惑は物語の終りまで解けないであろう。冷たい滑かな蝋人の肌に惹かれて、小説家は狂気する。老人形師は彼の恋がたきである。その狡猾な術策と戦わねばならぬ。美女は彼を魅惑し、翻弄し、あらゆる痴態をつくすであろう。その幾場面が語られる。

或る時は、むせ返る酒場の喧噪の中に、妖女は透き通るからだを酔いの桃色に染めて嬌笑するであろう。或る時は、廃園の森の奥深く、泉の水中に長いかみの毛を藻となびかせて、も

がきたわむれるであろう。真紅のビロウドのベッドを背景としてもよろしい。青空の風船の吊籠の別世界に、詩人と妖女と相抱きながら、下界を嘲笑してもよろしい。しかし、二人のうしろには、たえまなく、老魔術師の黒い影と、狡猾な悪念がつきまとっている。

さて、その『揚句』は美しき死であろうか。小説家はこの世のほかの妖美に酔いしれて、女と折り重なって息絶えるであろう。そして、美女の死体は、人肉ではなくて、永遠に変ることなき、透き通る蝋の肌なのである。

（「講談倶楽部」昭和二十九年九月増刊）

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集　第17巻　化人幻戯」光文社文庫、光文社
　　2005（平成17）年4月20日初版1刷発行
初出：「講談倶楽部」講談社
　　1954（昭和29）年9月増刊
※底本における表題「自作解説」に、作品名を補い、作品名を「「悪霊物語」自作解説」としました。
入力：植松健伍
校正：Juki
2019年7月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「悪霊物語」自作解説

江戸川乱歩

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/